

中世都市の慣習法とその史的基盤 (二・完)

——ノリッチ市の場合——

田 中 正 義

Ⅲ・承前

第41章——『穀物[一小麦](*bladum*)・魚(*pisces*)・肉(*carnes*)・獣毛織物[一毛織物](*animalia panni*)・羊毛(*lana*)[以下、二語意味不明]の如き、如何なる種類の商品たりとも、陸路或いは水路当[Norwich]市に賣らさるる(quo¹ venit ad ciuitatem per terram vel per aquam)その他如何なる売品(*venale*)たりとも、領主たる王或いは彼の執行官たちに依る・夫れらに賦課される所の慣習的貢租或いは彼[一王]の市場使用料(*tolnetum*)の徴収を締め出し又は妨げるような形で(ad excludendum vel impediendum dominum Regem nec eius ministros de consuetudine inde debita vel tolneto suo), 同[Norwich]市に於て如何様なる仕方に於ても——中庭に於ても屋敷内に於ても[夫れら商品・売品が]隠匿(*occulto*)せられると云うことがあってはならない(in eadem ciuitate quoquomodo occultetur neque in curia neque in domo)。また何びとと雖も当[Norwich]市に於て異郷人(*extraneus*)の有体動産(*bona*)を如何なる口実(*color*)の下にもせよ彼等の物であるかの如く正当占有の申立てを為してはならない(nec aliquis in ciuitate aduocet bona extraneorum tamquam sua sub aliquo colore), また当[Norwich]の町より或いは当[Norwich]の町へ向けて異郷人の有体動産を公然と或いは秘かに(*palam vel occulte*), 当[Norwich]市の条例並びに特権に反して(*contra statutum et libertatem ciuitatis*)王の慣習的貢租或いは市場使用料[収入]が奪われ喪われるが如くにして(per quod consuetudo vel tolnetum Regium asportetur et perdatur contra statutum et libertatem ciuitatis), 何らかの口実(*velamin*)の下に彼自身の物であるかのように、運ぶことがあってはならない(nec faciat conductum a villa nec versus villam de bonis extraneis palam vel occulte sub aliquo velamine ut sua propria)。而して、このような違反行為に就いて有罪と決定せられた[ところの]者は、領主たる王の当該慣習的貢租並びに市場使用料を倍額[支払う](*dupplico*)べきである(Et illi [qui] de huiusmodi delicto poterint conuinci duplicabunt consuetudinem et tolnetum domini Regis.....)[以下、その他の詳細なる罰則規定省略]。

本章に現われる市場使用料(*tolnetum*)は、1086年成立の‘Domesday Book’に於ては*theloneum*《なる形において³¹⁾、1148年成立の‘Winton Domesday’³²⁾の第2部に於ては*thelonium*《な

31) E. g. Domesday Book, Vol. I, folio 336 ; 336 b ; 337, 375 ; 375 b ; 376.

32) Winton Domesday, Survey II, folio 15, [58]・[59].

る形において、1155～58年に Henry II が Winchester(Hamps.)市に賦与したるチャータに於ては《theloneum》なる形において³³⁾、それぞれ現われて居るのであるが、夫れは元来、中世イングランドにおいて、最高の封主としての王のチャータ或いは開封勅書 Letters Patent に依って認可せられた所の「市場」を有する都市、の言わば最も象徴的な課税形態を表わして居るのである³⁴⁾。その場合、既に第37章に就いて我々の之を見たる如く、一切の商品の販売は、斯かる市場使用料が確実に徴収せられ得べき、一定の空間的に限られた場所すなわち「都市の公共の共同市場」(*forum publicum et commune ciuitatis*)に於てこそ行われねばならず、決して都市民の屋敷の中庭その他屋敷内に夫れらの商品が運び込まれ隠匿せられて、市当局の眼を掠めて隠然と、非公然の形に於て取引せられてはならないのである。——このことを、此の第41章は罰則規定を伴って厳しく規定して居るのである。

第42章——『如何なる異郷人(*extraneus*)も、[斯かる客人をもてなす所の]彼の主人役(*hospes*)たる者[一都市民]にしていま彼をもてなす責任を感じざれば[一もてなす気にならなければ](*nisi hospes suus sit respondens pro eodem*)、当[Norwich]市に於て一日と一晚以上に亘って(*ultra unum diem et unam noctem*)[客人として]もてなされ[宿泊せしめられ]るべきではない(*nullus extraneus hospitetur in ciuitate ultra unum diem et unam noctem*)、そして若し又たまたま(*aliquo casu*)当[Norwich]市に於て金銭債務(*debitum*)[の行為]、[他人の]権利侵害(*transgressio*)[の行為]——夫れに関しては彼を相手取っていま一つの訴訟(*secta*)が提起せられて居る——のために当該異郷人にして逃亡(*fuga*)を企てるとせんか(*et si aliquo casu pro debito et pro transgressione in ciuitate facta extraneus querat fugam*)、その時は直ちに(*statim*)[当該異郷人の]有体動産並びに人的財産(*bona et catalla*)をベイリフたち[の移動禁止令状]に依って彼[一異郷人]の主人役[たる当該都市民]の掌中に保持(*defendo*)せしめ(*statim defendantur bona et catalla per Balliuos in manu hospitis sui*)夫れらに就いて何がどれだけ其処に保管(*defendo*)せられて在るかの実地検証(*visus*)を為さしめて(*et de eisdem habeatur visus qui et quantum sit defensum ibidem*)、夫れら[一有体動産並びに人的財産]を、斯かる異郷人が今や決然として[改悟し]正道に就くべく自ら決意するに到るまでは、——且つ又、法と当[Norwich]市の慣習に拠り(*per legem et ciuitatis consuetudinem*)夫れに就いて彼[一当該異郷人]が彼[一その主人役たる都市民]に対し彼を満足せしめるに足るもの[一条件]として提示(*ostendo*)し得る所のものに従う義務の有る彼[一当該都市民]に対し[最終的に]満足を与えるべく[自ら決意するに到る]までは(*quousque talis extraneus se attachiauerit de stando*)

33) J. S. Furley, *City Government of Winchester from the Records of the XIV & XV Centuries* (Oxford, 1923), pp. 178 f.

34) 拙稿「中世都市民共同体の生成—ノリッジ市の場合」(「立教経済学研究」第43巻第4号), 119, 120 ペイデ, 参照。

recto et de satisfaciendo illi cui tenetur secundum quod per legem et ciuitatis consuetudinem ostendere poterit versus eundem quo inde ei satisfacere debet), 決して夫れら[一有体動産・人的財産]を[当該異郷人に対して]引渡す(*delibero*)と云うことがあってはならない(*nullo modo illa deliberentur*)。しかして、若しも斯かる主人役[たる都市民]にして[ベイリフたちに依って]彼に課せられたる所の移動禁止令に反して此の様な有体動産・人的財産を[客人—異郷人に]引渡すことがあるならば(*et si talis hospes huiusmodi bona et catalla contra defensionem sibi factam deliberauerit*), 当該主人役[たる都市民]をして、若しいま彼が[都市裁判所に依り]有罪と決定せられた場合には当の主債権者(*principalis*)が為す[一要求する]でもあろう所に従い、[曾て]彼の掌中に保管(*prohibeo*)せられて居た所の物[一異郷人の有体動産・人的財産]の価値(*valor*)[の額]に達するまで、訴えられたる債務・為されたる侵害に関して、嘆願者(*petens*)また訴追人(*querelans*)に対して、責任を負わしめるべきである(*respondeat ille hospes de debito petito et de transgressionem facta petenti et querelanti ad valorem rei prohibite in manu sua secundum quod faceret principalis si conuinctur*)。而して、仮令いま上記の主人役[たる都市民]が斯くして訴追人を満足せしめたとしても、而もなお彼[一主人役]に対し、彼が彼等[一ベイリフたち]の移動禁止令に反して夫れら[の有体動産・人的財産]を解き放った[一客人たる異郷人に引渡した]と云う理由を以て、ベイリフたちの手前[都市裁判所に依って]重い罰金が科せられるべきである(*et si licet predictus hospes sic satisfaceret querelanti tamen versus Balliuos grauiter amercietur pro eo quod illa liberauit contra defensionem eorum*)、而して、彼をして、彼がいま領主たる王の条例の文言(*forma*)に副って彼自身の責任に於て彼[一異郷人]を[客人として]もてなすことを意図するのでない限り、もはや如何なる異郷人をも上記の期間[一日と一晚]以上に亘って(*ultra dictum terminum*)[客人として]迎え入れ(*recipio*)しめるべきではない(*et nullum extraneum ultra dictum terminum recipiat nisi velit suo periculo pro ipso respondere secundum formam statuti domini Regis*)。』

本章の規定に依って、何はともあれ先ず以て我々に強く印象づけられるのは、Norwich市の都市民仲間(*conciuis*)—都市の同輩(*par civitatis*)たる所の此の都市の本来の都市民と、斯かるNorwichの都市民共同体の構成員ならざる所の異郷人(*extraneus*)[=余所者]——イングランドの他の都市出身の者[一商人]或いは又イングランド以外の他の国出身の異邦人[一商人]とのあいだに、爰に劃然たる一線が引かれている、と云う、此のことでなければならない。而して、その場合、此のNorwichの都市民共同体に属する所の総ての者の間に於ては周到に「平等」関係が構築されている反面、是れとは対蹠的に、異郷人はおしなべて斯かるNorwich都市民の有する有利なる現実的諸条件を拒否せられており、彼等は都市民からは歴然と疎外・差別せられて居るのである。——我々は、其処に、一般に当時の中世都市における排他的・閉鎖的な

共同体の意識がいま如何に鮮烈なるものであったか、を、此の一章を通じて改めて思い知らされるのである。

第43章——本章は一章全体の大意に於ては凡そ明瞭ではあるものの部分的に其処には極めて曖昧な箇所が含まれている——『当[Norwich]市のさまざまな人びとと共にさまざまな職業(*officium*)において一日一ペニ[の賃銀を以て]働く所の多数の奉公人たち(*plures seruientes operantes cum diuersis hominibus de ciuitate in diuersis officiis unum denarium pro diurno &c.*)——彼等は斯かる[低賃銀の]職業以外いま如何なる仕事にもありつくことを得ない者たちなのであるが(*qui nichil aliud habent nisi officium tale*)——中略——其処よりして彼等は罪を犯す所の大胆不敵さと云うものを夫れ丈け多く身につけていて(*unde maiorem audaciam sibi assumant delinquendi*), 曾ても為された如き此の様な人間どもの諸々の非行(*maliciis*)に今後終止符を打たんとしても(*ut maliciis huiusmodi hominum decetero obuietur ut fiebat ab antiquo*)若干の場合には彼等の身柄は拘束せられ得ないがゆえに(*pro eo quod corpora in quibusdam casibus non sunt aristanda*), 且つ又, 彼等の主人(*dominus*)[一雇傭者]たる者たちは, 彼等が前述せる如く仕事の賃銀としては[僅かに]一日一ペニを受け取る[に過ぎない]ので彼等の世帯(*manupastus*)を持って居ない[一持つことが出来ない]ために彼等に責任を負い得ないがゆえに(*quod domini sui non snnt pro eis respondentes eo quod non sunt de manupastu eorum quia recipiunt denarium diurnum pro denario operis ut predicitur*), ——かくして, 何びとかが当[Norwich]市において彼等に依り行われたる何らかの権利侵害(*transgressio*)に関して 動産質をとって(*per vadium et plegium*)彼等を相手取り訴訟を起す場合(*quod tales cum aliquis versus eos per vadium et plegium sequatur pro aliqua transgressione per eos commissa in ciuitate*), 何びとも, 彼等が今や法に対して彼等自身を正当化する[一法廷に於て身の潔白を証言する]に到る迄は(*quosque se iusticiauerit legi*), 彼等を何らかの仕事(*opera*)を為すに受け入れる[一彼等を雇傭して何らかの仕事に就かしめる]ことを為し得ざるものとする(*nullus eum recipiat in aliquo opere faciendo*)。而して, いま若し何びとかが[このことに]違反する(*venio in contrarium*)に到れば, 彼はペイリフたちの手前重い罰金を科せられるべきである(*Et si quis veniat in contrarium grauiter amercietur versus Bailliuos.*)。而して, 斯くの如き犯罪者たち(*delinquentes*)にしていま若し[法廷に出頭することに依って][その日の]仕事を失うことを理由に(*propter operis amissionem*) 彼等自身を[法に対して]正当化する[一法廷に出廷して身の潔白を証言する]ことを欲せざらんか, そのときは(*in hoc casu*)彼等は当[Norwich]市に居住(*moror*)することを許されざるものとする(*Et quod tales delinquentes si se nolint iusticiare propter operis amissionem in hoc casu non permittatur in ciuitate morari.*)。』

本章に現われる所の奉公人たち—《seruientes》は、既に先きに第38章・第39章に於てもひとたび現われた所の者であるが、然し乍らこのたびの《seruientes》は、たとえひとしく《seruientes》なる名辞を以て表現せられて居ても、第38・第39章における夫れとは其の社会的存在形態としての実体を異にするものと考えられる。何となれば、第一に、第38・第39章における《seruientes》は、取引(*mercandis*)或いは買入れ(*empecciones*)において本来の都市民たる彼等の主人(*domini*)を幫助する役割を演ずる所の、本来の都市民に個別に従属する所の前期的な雇傭労働者である。第二に、第39章の規定に依っても明らかなように[本誌前号65ページ参照]、第38・第39章における《seruientes》はいま入市(*introitus*)の儀式=手続を経て彼等の主人とまさしく同格なる、都市の同輩(*pares ciuitatis*)に上昇=転化し得る展望を有する所の存在である。第三に、第38・第39章における《seruientes》は、これまた第39章の規定の明らかに之を示している如く[本誌前号66ページ参照]《seruientes》の立場に於てなお且つその主人と共に彼等自身の用途に充て得べき所の収益(*lucrum*)に与かり得た所の者である。——然るに、このたび本章に現われた所の《seruientes》は奈何と曰うに、先ず第一に、取引・買入れと云った商業活動に決して限定せられず、さまざまな人びとと共にさまざまな職業(*officium*)に携わる者である。第二に、——是れは決定的に重要な点であるが——、彼等は世帯(*manupastus*)を構成せざる所の者である。而して日当僅かに一ペニを以て主人たる「さまざまな人びと」—都市民の下に傭われて働く所の、最下級の前期的雇傭労働者であって、彼等が屢々都市共同体の尊重すべき古来の慣習法を大胆不敵にも蹂躪して諸々の非行(*maliciis*)に走るのも抑々このような彼等の余りにも惨めなる社会的境遇に由来して居るのである。彼等がいま如何に貧困であったかは、たとえ都市裁判所に依って召喚せられても、彼等が日雇労働者としてその日の仕事にあぶれることを以て屢々其の不出廷の理由となしたることに依っても是れを察知するに難くない。之を要するに、本第43章に現われた所の《seruientes》は、筆者には、当時一般に都市民の中からは排除せられたところの、商業以外の・種々なる手工業に従事せる前期的=封建的雇傭労働者の一階層であった、と判断せられるのである。

第44章——『当[Norwich]市の[町を取り巻く市壁(*murus*)³⁵⁾の外側を繞るところの][濠]濠(*fossatum*)は、[其処に都市民が放牧する]種々なる家畜たちに依り塞がれるため(*propter fedacionem animalium diuersorum*) 勤なからず(*non modicum*)[その機能を]損われる(*deterioro*)がゆえに(*quia fossata ciuitatis non modicum deteriorantur propter fedacionem animalium diuersorum*)、当市に於て斯かる家畜たちを所有する所の各人は(*unusquisque habens animalia in ciuitate*)夫れら[一家畜]を濠に近づかしめぬよう、一年に四回(*quater in anno*)、街(*vicus*)から街へ(*de vico in vicum*)、市門(*porta*)から市門へ(*de porta ad portam*)、ひろく(*communiter*)[町中に]公告(*proclamo*)すべきである(*communiter pro-*

35) 既引「Custumal」第36章の臨時の献金—《auxilium》に関する記述箇所[本稿(一)の本誌前号58-59ページ]参照。

clametur quater in anno de vico in vicum et porta ad portam quod unusquisque habens animalia in ciuitate illa faciant custodire a fossatis)。而して、いま若しその同じ濠において一匹〔の家畜〕が何らかの仕方で発見せられたならば(et si ita sit quod aliquomodo inuentum in eisdem capiatur), 当該家畜の主人〔一飼主〕が濠の修理のため〔賠償金を〕支払(soluo)い終える(dominus illius animalis soluerit ad emendacionem fossatorum)か又は市壁補修税(muragium)として一匹の家畜の〔四足の〕一足毎に(pro quolibet pede animalis)一ペニイを支払い終える(vel ad muragium pro quolibet pede animalis unum denarium)かするまで、各市門の守衛(custodia)たちをして夫れ〔一その一匹の家畜〕を捕獲(capio)し留置(detineo)せしめるべきである(capiatur et detineatur per custodes portarum)。而して、斯くして夫れを捕獲せる所の彼は、〔都市当局に依り四足の一本につき一ペニイの割で〕徴収せられた所の〔一匹についての全徴収額たる〕四ペンス毎に(de singulis quatuor denariis)彼の骨折り〔の駄賃〕として(pro labore suo)一ペニイを与えられるべきである(ipse qui ea sic ceperit habebit pro labore suo de singulis quatuor denariis sic receptis unum denarium)。〔而して〕彼が彼の誓約に依って(per sacramentum suum)〔その職務に〕忠実に(fideliter)其処〔一濠〕にて発見せられたる総ての家畜を捕獲・保護(custodio)するが如くに(ita quod per sacramentum suum fideliter capiat et custodiet omnia animalia ibidem inuenta), 而して斯くして徴収せられたる金銭を(denarios inde receptos)何ら出し惜しみすることなく〔一部着服するが如きことなく〕(sine aliquo parcedo)上述の市壁補修税に(ad muragium predictum)全額(integros)支払う〔一納入する〕(persoluo)するが如くに(et denarios inde receptos integros persoluat ad muragium predictum sine aliquo parcendo), 〔為さしめるべきである〕, 而して、このこと〔一以上の事〕に対し(ad hoc)差し当り現に存する〔ところの〕諸市門の守衛の執れの者も(custos portarum [qui] in tempore fuerit)今後永久に(in perpetuum), 年に一度(semel in anno)〔その遵守を〕誓約(iuro)するが如くに(ad hoc semel in anno iurabit quilibet custos portarum [qui] in tempore fuerit in perpetuum), 〔為さしめるべきである〕。』

本章の記述から、我々は、其処に、当時の Norwich の中世都市としての ‘topography’——其の周囲に市壁(murus)を繞らせて、市壁の諸所に市門(porta)が明いており、市壁に囲まれた其の内部には東西南北に街路(vicus)が四通八達して居る——をほぼ具象的に髣髴せしめ得ると同時に、また其の経済生活に於て此の都市が当時一般に中世都市の多かれ少かれ具有したる所の半農村的性格を有していたこと——概言すればその住民が市壁に劃された所の都市空間の内外に〔小面積の耕地・庭畑地とともに〕各種の家畜一牛・羊・山羊・豚等を飼育する所の土地を保有して、未だ農民的性格を全体として根柢的には揚棄し居らざるところの存在であったこと、の一端を認識し得るのである。

IV

以上、我々は、本稿の第Ⅱ節から第Ⅲ節にわたって、極めて早い時代から(*ab antiquis*) 此処 Norwich 市において保持 = 運営せられ来った法と慣習とを事実上第13世紀末の時点に於て綜括せるところの文書、と考えられる、ほぼ1308年頃成立を見た《Liber Consuetudines》—‘Customal’ について、具さに検討し来ったのであるが、本節では我々は、茲に視点を換えて、第13世紀末此の Norwich 市の法と慣習とが斯かる形に於て集積 = 結晶を見るに到るまでの歴史過程を、翻って其の出立点に立ち帰り、回顧 = 展望してみようと思う。

Norwich が1066年のNorman Conquest 以前—Anglo-Saxon 時代の末期に於て既に其処に造幣所(*moneta*; mint)の存するところの *burh*(borough)として幾許かの重要性を有する都市にまで発達して居たことに就いては、筆者は前稿[「中世都市民共同体の生成—Norwich 市の場合」]に於て之を考古学的・文献的に聊か明らかならしめる所があったのであるが³⁶⁾、斯くの如く Anglo-Saxon 時代末期から「征服」以後の Norman 王朝時代にかけて此の都市が興隆を見たる諸条件としては、先ず以て政治的要因が挙げられなければならない。即ち、此処には「征服」直後征服王 William I に依って一つの城郭が築かれ、夫れはこののち長く、第12世紀 Plantagenet 王朝の始祖 Henry II の治世年間ほぼ1166年の頃に至るまで、元来もと Angle 族の一部族国家—East Anglia 王国を形成せる・今や Norfolk, Suffolk 両州から成る所の此の East Anglia 地方に於ける、唯一の royal castle として存したばかりではなく、又、「征服」前夜の事實上最後の Anglo-Saxon 王 Edward the Confessor の時代より Norman 王朝時代にかけて此処 Norfolk, Suffolk の両州は、一人の共通の州奉行(*scir-gerefa*; *vicecomes*; sheriff—Norman 朝期における Roger Bigot, William Bigot 父子、或いはまた Robert fitz Walter のごとき——を有し、両州の人民の裁判集会(county court)は、Norman 王朝時代当時屢々第12世紀にかけて East Anglia 地方の統治の中心たりし此処 Norwich の地に於て合同にて開かれたごとくに思われるのである³⁷⁾。

併しながら、Anglo-Saxon 時代末期から Norman 王朝時代にかけての我が Norwich 興隆の根源的な要因としては、上述の如き政治的要因にも増して経済的に此の市が——特にその南方に——豊かなる Hinterland——人口稠密なる後背地を有して居たことを挙げなければなら

36) 「立教経済学研究」第43巻第4号所載の上掲拙稿、第Ⅰ節、参照。

37) James Campbell, 'Norwich', in *The Atlas of Historic Towns* (ed. by M. D. Lobel & W. H. Johns), Vol. 2 (Baltimore, 1975), p. 5; W. A. Morris, *The Medieval English Sheriff to 1300* (Manchester, 1927; Reprinted, 1968), pp. 23 f., 47, 76, 78, 81. なお, Norwich には1094~96年の頃従来は Thetford に在った司教座が当地に遷されることになったため、爾来此の市は嘗に政治的にのみならず今や宗教的にも East Anglia の中心的なる地位を占むるに到ったのである。 Cf. E. B. Fryde, D. E. Greenway, S. Porter & I. Roy, ed., *Handbook of British Chronology* (London, 1941; 3rd edn., 1986), p. 261.

ない。かの征服王の命に依って成った1086年の‘Domesday Book’は、Norwich を中心とする半径20マイル以内の地域は、当時のイングランドに於ける人口最も稠密なる地域に属したることをほぼ明らかならしめて居り、此の範囲内に入るところの七つの hundred[郡]は、1平方マイル当り20人を超える人口を擁したることを示して居るのである³⁸⁾。而して、市の東方に拡がる広大なる沖積層の低湿地は、‘D. B.’ 当時広く放牧地として利用せられたのであるが、第12世紀の初期に到ってもその事情の何ら変らなかつたことは、Norman 王朝最後の王 Stephenが、Robert の息子 John[John de Cheyney]なる者に対して、1135~46年の間に与えた、一つのチャータの是れを証明する所である。即ち、いま夫れに拠れば、王は、John に、当時 Norwich 市と此の都市の東方北海に臨む所の Yarmouth 市との中間に存した、王の所有に属せるところの、実に1,000匹の羊群を収容し得る羊欄(*becaria de mille ovibus*)を、此の羊欄に附属せる王の所領たる低湿地(*mariscus*)と共に、譲与(*concedo*)して居るのである(.....*concedo bercarium meam de mille ovibus quam habui in meo dominio inter Norwic(um) et Iernemutha(m) cum dominico marisco meo quod pertinet ad bercariam meam supranominatam de mille ovibus*)³⁹⁾。因みに、‘D. B.’ より後ること殆ど3世紀近く、第14世紀後葉1377年、Plantagenet 朝最後の王 Richard II の治世年間、議会の可決に基づいて行われた、第一回の人頭税賦課に関する報告書(Poll Tax Returns)に拠れば、時に此の課税の対象となれる14歳以上の男女数において97,817名を算えたところの Norfolk 州は、当時人頭税の賦課されたイングランドの全30州中人口の最も稠密なる州に属して、その1平方マイル当り65.5人はいま最高の人口密度を表わしたのである⁴⁰⁾。

しかもなお、初期の Norwich 市は、‘D. B.’ 当時異常に高い人口密度の Hinterland を有した点で恵まれて居たに止まらず、剩れ夫れは Norfolk 州全体を通じて数少ない borough の一つである、と云う点に於ても恵まれていた。‘D. B.’ に拠れば、いま Norfolk 州は、其の農村人口は26,309名を算えて、Domesday Survey の対象となれる全35州中最高の数値を示しているとき、一方其の borough 数は、Wiltshire の10, Somerset の9, Kent の8に対して、Norwich 以外、当市の西南方—Suffolk 州との州境近くに存する Thetford, そうして前記の Yarmouth, と、僅かに3を数えるに過ぎなかつたのである⁴¹⁾。

38) もとより ‘D. B.’ の数字は、屢々同一人物が一つ以上の村落 (*villa* ; *township*) に於て記録せられて居るから、是れをそのまま受け取る訣にはいかないが、併しながら、夫れが与えるところの一般的印象は真実を表わして居るものとして受容することが出来る。Cf. H. C. Darby, *The Domesday Geography of Eastern England* (Cambridge, 1952 ; 3rd edition, 1971), pp. 116, 117 : Fig. 27 & 28 ; Campbell, *loc. cit.*, p. 6.

39) *Regesta Regum Anglo-Normannorum, 1066-1154* : Vol. III, 1135-1154, ed. by H. A. Cronne & R. H. C. Davis (Oxford, 1968), no. 175(p. 63). なお、Anglo-Saxon 時代に遡る羊欄の歴史的沿革については、拙著『イングランド封建制の形成』(新版、御茶の水書房、1977年)、91ページ、参照。

40) Cf. J. C. Russell, *British Medieval Population* (Albuquerque, 1948), p. 132 ; Table 6.4. ; p. 313, Table 11.8.

以上概述せるが如く、Anglo-Saxon 時代末期から Norman 王朝時代にかけて 其処に見られた此の Norwich 市の興隆の根源的な要因としては、経済的に此の都市が其の人口稠密なる後背地(Hinterland)を有したことが先ず以て指摘せられるのであるが、然らばそのことの真に意味する所のものはいま奈辺に存するのであろうか?——夫れは、取りも直さず、此の都市が斯かる其の後背地に対して、長距離商業(long-distance trade ; Fernhandel)ならざる短距離商業(short-distance trade ; Nahhandel)の中心としての局地的市場(local market ; Lokalmarkt)を提供すると云う、経済的機能を果たした所にこそ、正しく認められるのである。即ち、当時此の市は、其の周辺の人口密度高き農村地帯における農民家族の世帯が、自らの必要生活手段(die notwendige Lebensmittel)を控除し且つ領主に対する生産物地代(Produktenrent)給付の義務を果たしたあと手許に残るところの、其の余剰生産物(Mehrprodukte)——夫れは本来の余剰農産物のほかにその内に彼等農民家族が営む所の家内仕事(Hauswerk)に於ける余剰手工業生産物をも亦含む——を、いま毎週此の市に於て曜日を定めて開かれる定期的市場一週市(weekly market ; Wochenmarkt)にもたらして、其処に於て、斯かる農民と当市に定住する独立の小生産者たる所の手工業者とが、専門的な商人(professional merchants ; berufsmäßige Kaufleute)に依る媒介(Vermittlung)を経ることなく、直接に(direkt)夫々の生産物を交換する、と云う、いま直接的な生産物交換(der unmittelbare Produktaustausch)の場を提供する所の機能を果たしたのである。その際、此の場合の都市の手工業者は、一般に購買並びに販売に関係する所の者と云う意味での商人の性格を一面有して、その制作に係わる手工業生産物を近郊農村から徒歩で出かけ来った農民に売却し、代りに彼等よりその余剰生産物——穀物を始めバター・チーズ等の酪農製品また果実・蔬菜のごとき一般的に食料品、或いは羊・牝牛と云った家畜、その他農家の家内仕事の所産たる各種衣料品・皮革・羊毛の如きものを、購入したのである。当時、一般に斯かる農民たちに依る中心都市の局地的市場一週市に出向き暗くならない裡に帰村する遠出は、第13世紀 Henry de Bracton(+1268)の観察に従えば、全行程20マイルを出ることはなかった、と曰われている⁴²⁾。

夫れでは、当時 Norwich にはどのような手工業部門が見られたのであろうか?

既引の W. Hudson & T.C. Tingey, ed., *"The Records of the City of Norwich"*, 2 vols. の編者の一人 Tingey は、彼の直接担当せる上記『記録集』第2巻の序説中に、「第13世紀後半の夥しい量の諸記録から」(from the abundant records of the last half of the 13th century) 彼の作製したところの、当時 Norwich に於て営まれていた種々なる trades, occupations に関する長大なるリストを掲げている。——夫れは、下表の如きものである⁴³⁾。

41) H.C. Darby, *Domesday England* (Cambridge, 1977), p. 336 ; Appendix I.

42) Cf. Colin Platt, *The English Medieval Town* (London, 1976), p. 75 ; p. 196 : Chap. 3, n. 1.

43) Hudson & Tingey, ed., *The Records of the City of Norwich*, Vol. II, Introduction, pp. xxv-xxvii. ◎注意 キッコー(亀甲)内は引用者の補足、各項の頭初の番号並びに*印は新たに引用者に依って附せられたもの。

1. Apothecary, Unguentarius [薬剤師]
2. *Armourer, [furbarius] [甲冑等研磨師]
3. *Axsmith, exsmith [手斧鍛冶]
4. *Baker, baxter, pestour, pistor [パン焼職人]
5. *Barbor, barbour, barbitonsor [理髪師]
6. *Basket-maker, skepper [籠作り]
7. *Bell-founder, belleyetere, bellge makere, campanarius [釣鐘鋳造師]
8. *Bleacher, blekester [漂白工]
9. *Boatman, battilarius [船頭]
10. *Book-binder [製本師]
11. Brevetur [免罪符売り?]
12. *Brewer, braciator, [brachiator] [麦酒醸造人]
13. *Bridle-maker, lorymar, lollimar, lorimarius, [lorimer] [馬具師]
14. Bukmongere [猟鳥獣の肉商]
15. *Burser [聖布囊(聖体布入れ)作り]
16. *Butcher, le macecref, carnifex [屠畜業者]
17. *Carpenter, [carpentarius] [大工]
18. *Carter, carectarius, [caretarius] [車方]
19. *Chaloner [毛布製造工]
20. Chamberlain, camerarius [式部官]
21. Chaplain, capellanus [礼拝堂付司祭]
22. Chapman, [chepman] [呼売り]
23. *Chandler, candelar, candle-maker, [cerarius] [蠟燭売り]
24. Chaucer, hosier, caligarius, [hosarius] [小間物商]
25. Cheesemonger, schesemonger, frumager [チーズ売り]
26. Clerk, clericus [書記]
27. *Clubbere [棍棒作り]
28. *Cobbler, souter, sutor [靴直し]
29. Combere, combester [梳毛工?]
30. Coner [錐作り?]
31. *Cook, coc, cu, keu, cocus [調理師]
32. *Cooper, cupere, cuvere, cuur, [butor] [桶屋]
33. *Co-opertor [屋根葺き職人]
34. *Cordwaner, allutarius, [cordwanarius] [靴屋]
35. Coteman [小屋住]
36. *Currier, coureur, coriarius [製革工]
37. *Cutler [刃物師]
38. *Dauber [佐官]
39. Draper, [drapier] [服地商]
40. *Dubber, dubbator [古着修理工]
41. *Dyer, [tinctor] [染色工]
42. *Farrier, farrur, mareschal, marescallus [装蹄師]
43. *Felter, feutrer [フェルト製造工]

44. *Fisherman, fecherman, piscator [漁師]
45. Fishmonger, pessoner, piscenarius [肴屋]
46. *Flecher [矢羽根作り]
47. Forester, parker, [parcherius] [王室獵園の監視人]
48. *Fripperer, feliper, pheliparius [羊皮紙製作工]
パーチメント
49. *Fuller, fullonarius, [fullo] [縮絨工]
50. *Furbur, furbeshur [磨き人]
51. Ganyer [?]
52. Gardiner, leekman にらねぎ [韭菜売り]
53. Gelman [?]
54. Gelmer [?]
55. Gerneys [?]
56. *Gerth-maker [馬の腹帯作り]
57. *Girdler, ceynturer, zonator [ガードル作り]
58. *Glazier, verrer [ガラス職人]
59. *Glover, le gaunter, cirotecarius, [wantarius] [皮手袋製作工]
60. *Goldsmith, orfevre, aurifaber [金細工師]
61. Gracer [?]
62. Harper, minstrel, harpeur [吟遊楽人]
63. *Hatter, chapler, capellarius [帽子製作工]
64. *Hirdeler [編み垣作り]
65. Horner, cornuarius [法権剝奪公告の笛吹き人]
66. Ironmonger, ferun [鉄商]
67. *Knife-handle-maker [ナイフの把手作り]
68. *Lacebreyder [レース編み工]
69. *Lantern-maker [箱提灯作り]
70. *Latoner [ラッテン板製作工]
71. Leatherbroker [鞣皮仲介商人]
72. *Leather-cutter, letherkervere [鞣皮裁断師]
73. *Leather-dresser, scouder, scouter [鞣皮仕上げ工]
74. *Leadbeater, ledbeter [鉛板たたき工]
75. Leech, medicus [医師]
76. *Limner, lomynour, luminur [手書本彩飾師]
77. Linen-draper, lindraper [リンネル布地商]
78. *Lymer [石灰焼き]
79. *Mason, machun, maschun, mazoun, cementarius, [maco] いし [石工]
80. Mercer, [merciarius] [高級服地商]
81. Merchant, [mercator] [毛織物商人]
82. Messenger, messenger [先触れ]
83. *Miller, milnman, meunier, mouner, molendinarius [製粉工]
84. *Mitten-maker [二股手袋製作工]
85. Monye, monk, moyne [修道僧]
86. *Mustarder からし [芥子売り]

87. *Nedler, agulier, acuarius, [acularius] [縫針作り]
88. Palmer [巡歴修道僧]
89. *Painter, peyntur, pictor [塗装工]
90. *Panter-maker [捕鳥^{わな}罠作り]
91. *Parcheminer, parcamentarius, [parcheminus] [羊皮紙^{パーチメント}製作工]
92. *Parmenter, paramenator [皮剥ぎ職人]
93. *Paste-maker [ペイスト製造職人]
94. *Plumber, plumbarius [鉛細工職人]
95. Porter, portarius, [custodia] [市門の守衛]
96. Poulterer, henne-monger, pulliter, pulletarius [家禽商]
97. Pudding-wife [おんなプディング売り]
98. *Punder-maker, pundreys [秤製作工]
99. *Quilter, culler [刺し子^{みことん}蒲団製作工]
100. *Reeder, reidere [葺^{ふき}葺^{わら}売り]
101. *Sadler, seler, sellarius [鞍師]
102. Salt-man, sauser, salsarius [塩商人]
103. Sanetur, sanur [?]
104. Scrivener, clericus [書記]
105. *Sculptor [彫り物師]
106. Servant, sergeaunt, serviens [奉公人]
107. *Shearer, tundur, tonsor [羊の剪毛人]
108. *Skinner, pelliparius [皮剥ぎ職人]
109. *Skirmischur [垣根作り]
110. Sloper, sleper, slepe [野良着商]
111. *Smith, fevre, faber [鍛冶屋]
112. *Spencer [食器棚作り]
113. Spicer, specer, especer, especarius [香辛料商]
114. *Sponer [スプーン作り]
115. *Spurrier, sporier [拍車師]
116. Surgeon, le sursyen [外科医]
117. *Tanner, barker, tannator [taneator] [皮鞣し職人]
118. Taverner, tabenarius, [tiplarius] [居酒屋の亭主]
119. *Tailor, talyeur, cissor, [tailator] [仕立屋]
120. Temester [引越し人夫?]
121. Templer [テンプル騎士団員]
122. *Tiler, tueller, tyweller, tegularius [タイル職人]
123. *Tinker, tinchere [鋳掛け屋]
124. *Turner, [tornator, tornitor] [轆轤師^{ろくろ}=挽物師^{ひきもの}]
125. Warrener [野生動物飼育地管理人]
126. Waxmonger, cyrer, cirer [蜜蠟商]
127. Wayte [夜回り]
128. *Weaver, webster textor, [telarius] [織布工]
129. *Wheelwright [車大工]

130. *White-tawer, qwittower [白なめし工]
 131. Woadman, weydere [大青(毛織物染料)商]
 132. Wollemonger, lanator, [leinator] [羊毛商人]
 133. *Wright [工匠]

いま上掲の表を通覧して、誰しもが先ず気付くことは、当時第13世紀後半 Norwich の都市民が如何に多種多様な trades, occupations に携わっていたか、と云うことであろう。即ち、其処には133項目にも及ぶところのさまざまな trades, occupations が挙げられて居るのであって、我々は当時この都市が其の社会的機能の特殊化(the functional specialization)に於て既に相当高度の展開度に達して居たことを確認することが出来るのである。と同時に、我々が上掲の表を通覧してみても気付くことは、其処に挙げられた所の133の項目に就いて逐一之を検するとき、瞭らかに夫々が特殊技能を表わす手工業の業種と認められるものが、少くともいま筆者が asterisk を附せるところの83項目の多きを数え、ほぼ全体の62パーセントを占めている、と云う事実、是れである[その際、当該業種がたとえ「〇〇売り」の現象形態を採っていようとともその社会的本質は飽くまで独立の小生産者以外の何者でもなく、彼等の販売物は彼等自身の自家生産に成れる所のものなのである]。——このことは、我々が曾て前節一第Ⅲ節に於て見たる、第13世紀末の歴史的現実を反映せる、かの‘Custumal’より受けたる一般的印象と甚しく異なり一見之を裏切るかに見える。‘Custumal’における其の商業(trade)並びに取引(merchandise)に関する規定を含む第33章から第44章にあっては、特に其の第36章の規定に明らかな様に、総じて自由=平等なる都市民たちの自由なる所の生業としては「商売を為すこと」(mercandizo)が其の基軸をなすものと規定されて居たのである[本誌前号56ページ参照]。然るに、第13世紀後半の Norwich に於て営まれていた133項目にも上る種々なる trades, occupations の中に就いて、純然たる商業・取引に関する夫れと目されるものは、いま、上掲表中、14, 22, 25, 39, 45, 66, 71, 77, 80, 81, 96, 102, 113, 126, 131, 132, その他——せいぜい20項目足らずを数え得るのみである。

この dilemma は、いったい我々は是れを如何に解くべきであろうか？ ‘Custumal’の規定するところは、当時の Norwich 社会の歴史的現実をまったく反映せざる、夫れより遊離せる所のものであったのであろうか？ 答は否、である。——‘Custumal’の規定こそ、まさしく当時の此の都市の「商売を為すこと」—商業・取引なるものが凡そ如何なるものであったか？——その性質を如実に物語って居るのである。夫れが、此の都市の各種各様の手工業部門に於ける・圧倒的多数の独立の小生産者—手工業者=職人たちに依る所のものであった、と云うことを。——彼等がいま手工業者であると同時に一般に購買並びに販売に関係すると云う意味での商人——具体的には小売商人の性格を併せ有したことを。斯くして、我々は、以上の推論に依って、当時第13世紀後半に於ける此処 Norwich 市の経済社会は、先ず以て長距離商業ならざる近距離商業の・専門的なる商人を介せざる所の・都市近郊の農民の生産物(Bauernprodukten)

と都市の手工業者の生産物(die Produkten der städtischen Handwerker)との直接的な交換(der unmittelbare Produktaustausch)の場として存する定期的市場—週市を中心に、現実には回転しつつあった、とひとまず基本的には結論することを得よう⁴⁴⁾。

尤も、斯く言えばとて、上述せる所は飽くまでも当時の Norwich の都市経済についてその基本的なる機構 = 構造を規定したるに過ぎず、週市は必ずしも常に近郊農民と都市手工業者との間に於ける直接的なる生産物交換の場としてのみ機能した訣では決してない。夫れはまた、都市手工業者相互の間に於ける夫々の生産物の直接的交換の場としても機能したのである。而して夫れはまた、経済的には専ら消費者の役割を演ずる所の都市民、——例えば、上掲表中26, 65, 82, 95, 104, 125, 127のごとき、此の都市共同体の社会的職務執行(die gesellschaftliche Amtstätigkeit)の機能を分担する所の公務員——かの 'Custumal' にいわゆる《servientes ciuitates》の下級分子[——彼等は斯かる者としてそくばくの Weber の謂う „Pfründe“ としての保有地 (Dienstland) を与えられて居る⁴⁵⁾]が、彼等の必要生活手段 (die notwendige Lebensmittel) を夫れらの生産者 (Produzenten) たる農民・手工業者たちから專業的商人を介することなく直接入手するところの場としても機能したのである。因みに、都市手工業者中一部の者、——例えば、上掲表中7, 10, 15, 48, 70, 76, 91, 105のごときは、週市から離れても、主として彼等の生産物に対する需要者たる所の教会・修道院[或いは富裕なる商人層]のために、言わば夫れらの専属職人として、彼等の生産に従事したと想われる。

それではいま、当時 Norwich 市に於ける各種部門の手工業者たちは彼等の自主的 = 自律的組織—ギルドを有していたであろうか？

此の問題に就いて我々に一つの解決の手がかりを与えるものは、1256年3月25日、Plantagenet 王朝第四代の王 Henry III (r. 1216~72) が親しく此処 Norwich の地に於て作成、同市に賦与したる所の一つのチャータである。その中には、いま次の如き一節が存する、——『而してなほ、[汝ら、朕が、朕並びに朕の相続人たちを代表してノリッチの朕が親愛なる都市民に對し]、如何なるギルド(Gilda)も向後(decetero) 当市[—ノリッチ市]の不利益になるべく上記の都市に於ては開かれ(teneo) ざるべきことを[既に允許したることを心得よ。](Et quod nulla Gilda decetero teneatur in ciuitate predicta ad detrimentum eiusdem ciuitatis.⁴⁶⁾』。——此処で此の都市の不利益(detrimentum)になるものと規定せられて居るところのギルドとは、抑々いったい如何なるギルドであろうか？ 夫れは商人ギルド(guild merchant)を指すのであろうか？ 夫れともまた同職ギルド(craft guild)を指すのであろうか？

此の点に関しては、嘗て前世紀前半、Merewether と Stephens 両人は、彼等の共著に成る

44) Vgl. Karl Marx, *Das Kapital*, besorgt v. Marx-Engels-Lenin Institut (Moskau, 1932-4), Bd. III, S. 33 [長谷部文夫訳『資本論』(青木文庫)第8分冊, 54ページ]。

45) 前掲拙稿, 第IV節, 124~5ページ, 参照。

46) Hudson & Tingey, edd., *op. cit.*, Vol. I, p. 17.

龐大な2,413ページにも上るところの〈極初期より今日迄の連合王国の自治都市・地方公共団体の歴史〉[1巻, 3分冊]に於て、次の如く述べたことがある⁴⁷⁾、——『1256年, 王[—Henry III]は, [Norwich市の]都市民たちに対して, 王の令状の執行報告書[を都市民自身が直接王に差出し得るところの権利](the return of writs), また[王の]州奉行その他の執行吏たち総ての者の[同市に対する]不介入(the exclusion of all sheriffs and bailiffs)を允許した⁴⁸⁾, そうして, 其処[—Norwich市]において取引する総ての商人たちは[同市の本来の都市民同様に]住民税(scot and lot)を支払うべき義務あることを規定し⁴⁸⁾, 延いては, 如何なるギルド或は[是れに準ずる]フラターニティ(fraternity)も当市内に於て, 夫れ[—当市]に損害を与えるべく保有せられざるべきことを規定した(—and that no guild or fraternity should be held within the city, to its damage), 是れ, 一般にギルドなるものが当時都市民たちから遮断せられて居たことを示す, 文句の付けようのない証拠である(—an irresistible proof, that guilds were separate from the citizens)。』と。是れに由って之を觀れば, 斯かる文脈に於て——いま本来の都市民ならざる外来商人との関連に於て専らギルドを捕捉せんとしている所の彼等は, 此処に謂うギルドは商人ギルドを意味して居ると解したのである。然るに, 斯くの如き Merewether = Stephens 解釈に対し, 前世紀末 Hudson は, その編著〈第13, 14世紀ノリッチ市に於けるリート裁判所の管轄権〉に於て之を反駁して, Norwich には未だ曾て商人ギルドの存在したる如何なる痕跡も存在しないと断じ, むしろ, いまリート裁判所記録(Leet Rolls)に現われたる諸告発(presentments)は, 我々に, 前記の Henry III のチャータの一節は之を手工業者たちの諸団体[の結成](associations of craftsmen)に反対することを意図したものと解することのより多く蓋然性を有する事を示して居るとなし, 斯かる団体は当時, Norwich 市の共同の利害に牴触し, 且つ[都市政府の]中央の権力に属するところの統制権を私人たちの手に掌握せしめるものとして(as interfering with the common interests of the City, and putting into private hands the control belonging to the central authority), Henry III 王に依り敵視せられたのである, としたしたのである⁴⁹⁾。此の見解は, 彼に依って, その後今世紀に入り 彼が

47) H. A. Merewether & A. J. Stephens, *The History of the Boroughs and Municipal Corporations of the United Kingdom, from the Earliest to the Present Time: with an examination of records, charters, and other documents, illustrative of their constitution and powers* (3 vols.; London, 1835), Vol. I, p. 437.

48) 住民税に就いては, 前掲拙稿, 第IV節, 124ページ, 参照。

49) William Hudson, ed., *Leet Jurisdiction in the City of Norwich during the XIIIth and XIVth Centuries* (London, 1892) [Selden Society Publications, Vol. V for the year 1891], Introduction, Notes B: *Craft Gilds in Norwich*, pp. lxxxviii-lxxxix. 因みに, 此処に謂う所の 'leet' (leta)とは, 元来は, 当時一部の都市に於て見られた, 都市の小行政区(ward)を謂い, 第13世紀末葉此処 Norwich には, Conesford, Mancroft, Wymer, *Ultra Aquam* (Over the Water) の四つの leet が其処に存した[四人のベイリフは実はこの四つの leet の一つに夫々責任を負った]のであるが, 此の leet なる名辭は転じてまた, 夫れらの区に存する所の刑事裁判所を指稱するにも用いられた。

Tingey と共に編める所の前掲『記録集』の彼の直接担当せる其の第1巻に於ても、再度確認せられている⁵⁰⁾。而して、Tingey も亦、彼が直接担当せる・第1巻に後れて刊行せられた同『記録集』の第2巻に於て、Hudson の所説に符節を合して、Henry III のかのチャータの一節は同職ギルド(craft guild)を禁止せるものと見做して居るのである⁵¹⁾。

叙上の Merewether = Stephens 説と Hudson = Tingey 説と、此の両説について、我々は、Henry III が1256年3月25日附 Norwich 市に与えたチャータに於けるかの一節の解釈に関しでは、後者の説を支持しようと思う。そのネガティブな理由は、Norwich に於ては抑々そこに商人ギルド(guild merchant)の存在したる形跡が認められないことであり、そのポジティブな理由は、Hudson も既に指摘して居るように、我々は同市のリート裁判所記録中に次の如き諸記述を見出すからである。すなわち、上記 Henry III の次代の Edward I 王(r. 1272~1307)の治世第21年—1292/3年、Norwich の「Conesford 地区のリート裁判所の科したる諸々の罰金」(Amerciamenta Lete de Conesford)に関する記録の一節——『彼等がいま領主たる王の禁止令に反して(*contra defensionem Domini Regis*)一つのギルド(*Gilda*)を有し(*habeo*)、夫れに依って彼等の徒弟たち(*apprenticiis*)について[夫々]二シリングを徴する(*capió*)がゆえに、しかして彼等自身の計算に於てひとりの靴直しとしての業務(*officium sutoris*)を営む(*exerceo*)彼等は前記のギルドに十シリングを納むる(*do*)者なるがゆえに、斯かる靴直し職人たち(*sutoribus*)に関して、[科する所の罰金]二十シリング(*De Sutoribus quia habent Gildam contra defensionem Domini Regis eo quod capiunt de apprenticiis suis duos Solidos et de hiis [sic] qui exercent officium sutoris per se dant decem solidos predictae Gilde (xx s.)*)。彼等はいま同様に(*similiter*)領主たる王に不利益をもたらす一つのギルド(*Gilda nocentem Domino Regi*)を有するがゆえに、斯かる鞍師たち(*sellaris*)に関して[科する所の罰金]—マルク[—13シリング4ペンス](*De Sellariis quia habent similiter Gildam nocentem Domino Regi (I mr.)*)。同様の理由を以て(*pro eodem*)、縮絨工たち(*fullonibus*)に関して[科する所の罰金]半マルク[—6シリング8ペンス](*De Fullonibus pro eodem (di. mr.)*)⁵²⁾』。又、上記の判決の行われた前年の1291年に、Norwich の Wymer 地区のリート裁判所の為せる諸々の告発に関する裁判所記録の一節には、其処に、『Richard de Stalham[なるひとりの皮鞣し職人(*tannator*)]が、彼の仕事に於て[その使用を禁ぜられている]となりこの樹皮をもって彼の[原材料たる]生皮(*correos*)を鞣すことを行い虚偽を働いて居ると云う理由(*quia facit falsitatem in opere tannando correos*)、——而して夫れはいま Stalsite ether と称ばれているが——、[彼を含むところの]彼等[—皮鞣し職人たち]が彼等の[原材料たる]生皮の[共同]購入において領主たる王に不利益をもたらす所の一つのギルドを有して居ると云う理由(*quia habent Gildam nocentem Domino*

50) Hudson & Tingay, ed., *op. cit.*, Vol. I, p. 17, n.1.

51) *Ibid.*, Vol. II, Introduction, p. xxi.

52) Hudson, ed., *Leet Jurisdiction in the City of Norwich*, pp. 42-3.

Regi in emendis correis), ベイリフたちの前に訴答せられねばならない諸々の権利侵害(*transgressio*)を修正(*corigo*)している[ママ]と云う理由(*quia corigant [sic] transgressiones que debent placitari coram Ballivis*)——以上、三つの理由に拠って[科する所の罰金]一マルク⁵³⁾(*i marc.*)』, とあるのである。

此処には、見らるる如く、皮革関係の手工業部門に属する所の靴直し(*sutor*)・鞍師(*sellarius*)・皮鞣し職人(*tannator*), 衣料関係の手工業部門に属する所の縮絨工(*fullonarius*)が纔かにいま挙げられて居るに止まるのであるが、恐らくは、当時 Norwich 市に於ては一般的に各種の手工業部門に亘って夫々の職人たちが彼等の同職組合(*craft guild*)を結成することを、夫れが領主たる王に不利益をもたらすもの(*nocentum Domino Regi*)として、禁止せられて居たことと思われるのである。——[i]衣料関係部門に於ける前記縮絨工以外前掲リスト19の毛布製造工, 41の染色工, 43のフェルト製造工, 63の帽子製作工, 68のレース編み工, 99の刺し子蒲団製作工, 107の羊の剪毛人, 119の仕立屋, 128の織布工, [ii]皮革関係部門に於ける前記靴直し, 鞍師, 皮鞣し職人以外前掲リスト13の馬具師, 34の靴屋, 36の製革工, 48・91のパーチメント製作工, 59の皮手袋製作工, 72の鞣皮裁断師, 73の鞣皮仕上げ工, 84の二股手袋製作工, 92・108の皮剥ぎ職人, 130の白なめし工, ——以上二部門の他, (iii)卑金属関係部門に於ける, 前掲リスト2の甲冑等研磨師, 3の手斧鍛冶, 37の刃物師, 42の装蹄師, 74の鉛板たたき工, 94の鉛細工職人, 111の鍛冶屋, 114のスプーン作り, 115の拍車師, 123の鋳掛け屋, ——(iv)土木建築関係部門に於ける, 前掲リスト17の大工, 38の佐官, 58のガラス職人, 78の石灰焼き, 79の石工^{いしく}, 89の塗装工, 122のタイル職人, 129の車大工, 133の工匠, ——食品関係部門に於ける, 前掲リスト4のパン焼職人[一パン屋], 12のエール醸造人, 16の屠畜業者[一肉屋], 31の調理師[一惣菜屋], 83の製粉工[一粉屋], 93のペイスト製造職人, ——(vi)日用雑貨関係部門に於ける, 前掲リスト6の籠作り, 23の蠟燭売り, 32の桶屋, 67のナイフの把手作り, 69の箱提灯作り, 87の縫針作り, 98の秤製作工, 100の茸蕈^{ふきのたけ}売り, 112の食器棚作り, 124の轆轤師^{ろくろ}[=挽物師^{ひきもの}], ——最後に(vii)輸送関係部門に於ける, 前掲リスト9の船頭と18の車力^{しやりき}, ——以上の者たちがそれぞれいま彼等の同職ギルド(*craft guild*)を結成することを, おしなべて禁止せられていたもの, とと思われるのである。

併し乍ら、当時、同職ギルド(*craft guild*)は、斯かる法的障害が其処に存したるにも拘らず、斯かる障害を乗り越えて、いよいよ発展せんとする機運を示した。斯くして、市当局もこのような現実^{じげん}に当面しては、此の際同職ギルドを一般的に抑圧せんとするよりは寧ろ其の存在の既成事実^{じけいじじつ}を認めて之をその監督下に置くことのより一層賢明なる施策たる所以を想うに到ったものと思われる。そのことの現われが、‘Custumal’の、その諸章の分類上我々に依って[C]雑の部に入れられて未だ曾て考察せられざりし、以下の如き第46章の規定、是れである、——『当[Norwich]市に於ける総ゆる工芸(*artificium*)ないし手工業(*officium*)がいま夫れが為さるべき

53) *Ibid.*, p. 39.

〔ルール〕に従い善良(*bene*)且つ誠実(*fideliter*)に何らの誤魔化しも無く(*sine fraude*)行われ得んがために(*ut quodcunque artificium siue officium in ciuitate usitatum bene et fideliter et sine fraude usitetur secundum quod debet*), かくして斯かる事柄に関し如何なる醜聞(*scandalum*)も当〔Norwich〕市〔の利害〕に反して惹起せざらしめ得んがために(*ita quod scandalum contra ciuitatem in premissis non poterit oriri*), 〔四人の〕ベイリフたち並びに〔全都市民に依って〕共同に選挙せられたる当市の廿四人〔委員〕に依りて(*per balliuos et viginti quatuor de ciuitate communiter electos*), 各手工業に就いてより一層思慮深くして信用し得べき所の二人或いは三人或いは四人(*duo vel tres vel quatuor de potencioribus et fide dignioribus de singulis officiis*), 或いはまた当市に於て行われ居る所の各手工業ないし工芸の大小の規模に応じて斯かる事柄に就き精通している其の他の者たち(*seu aliis qui noticiam habent in premissis secundum maioritatem et minoritatem cuiuslibet officii seu artificii in ciuitate usitati*), が, 毎年選出せらるべきである(*eligantur singulis annis*)。而して斯く選ばれたる者をして聖なる福音書に掛けて以下のことどもを誓わしめるべきである(*et illi electi iurentur super sacrosanctis euangeliiis*), 〔即ち〕彼等の各々の者が善良に誠実に且つ十分に(*plene*)当市に於て行われ居る所の各手工業ないし工芸を屢次, 少くとも一年に四回〔各職場毎に〕巡回(*visito*)し検査(*scrutor*)し(*bene et fideliter et plene singuli eorum officia seu artificia in ciuitate usitata frequenter visitabunt et scrutabunt ad minus quater in anno*), その他の時に於てもいま若し其のことが部分的にか或いは全体として必要になるとときには彼等の能力の及ぶ限りに於て此のことを為して(*et alias si necesse fuerit per medium et per totum in quantum possint*), 以て上記の諸手工業ないし諸工芸に於ける如何なる欺瞞(*fraus*)も如何なる詐偽(*dolus*)もまた如何なる虚偽(*falsitas*)も如何なる仕方にもせよ夫れらが創り出され或いは為され或いは行われ得ざるが如くになすべきことを(〔*ita*〕*quod fraus dolus nec falsitas in eisdem officiis seu artificiiis aut operibus operetur fiat vel usitetur quoquomodo*), 而して此の事を〔彼等が〕如何なる労をも惜しむことなく果さんことを(*et hoc sine alicui parcendo*), 而して総ゆる欺瞞・詐偽・虚偽は何時起らんとも如何に屢々起らんとも夫れらが彼等に依り発見せられたらん曉には(*omnem fraudem dolum et falsitatem quandocunque et quotienscunque per ipsos inueniatur*), 上記〔四人の〕ベイリフたちと共同体の名に於て選ばれたる所の(*nomine communitatis electi*)かの廿四人〔委員〕とが夫れら〔一欺瞞・詐偽・虚偽〕に就いて当然支払わるべき所の十分なる補償金(*emenda*)を徴収することを得且つ夫れら〔一欺瞞・詐偽・虚偽〕に関する限り斯くの如き醜聞(*scandalum*)〔の原因〕を取り除くことを得んがために(*ut prefati Balliui et xxiiii^{or} nomine communitatis electi debitas et competentes inde facere possint emendas et huiusmodi scandalum quatenus est in ipsis amouere*), ——斯くて彼等〔一四人のベイリフたち並びに廿四人委員〕が, 他の者たちがいま此の事のなかに将来先例を(*exemplum in futuro*)見出すことを得, その事が此の全〔Norwich〕市並びに其処に居住

する人々の名誉(*honor*)並びに祖国(*patria*)[—イングランド王国]の国益(*comodum*[sic])に跳ね返る(*verto*)ことを得て、当[Norwich]市の名誉を今後(*in posterum*)一層高からしむること得べく(*ut ceteri in hoc capiant exemplum in futuro et ad honorem totius ciuitatis et in eadem degencium et patrie comodum vertatur et honorem ciuitatis cedat in posterum*), 違反者たち(*delinquentes*)を「厳重に」処罰(*punio*)し懲らしむ(*castigo*)ることを為し能うべく(*et delinquentes sic punire et castigare*), 彼等[——欺瞞・詐偽・虚偽の発見者たる前記の選ばれたる者たち]が善良に誠実に如何なる虚構をも脚色をも為すことなく其処に見出さる有りとならゆる方法を以て[四人の]ベイリフたち並びに廿四人[委員]に何ら隠蔽することなしに告発(*presentatio*)すべきことを(*bene fideliter ac totum modum inuentum absque aliqua ficcione seu coloracione Balliuis et viginti quatuor presentabunt sine aliquo concealamento*), [前記の選ばれたる者をして聖なる福音書に掛けて誓わしめるべきである。]而して、いま若し[斯くして]宣誓(*iuro*)せしめられ上述の管理の仕事を行うべく選ばれたる者たちにして、彼等自身に職務怠慢の行為が有り(*negligentes se habeant*), 此の事に関して有罪と決定せられ、或いは上記の事柄に於て何らかの隠匿(*concelamentum*)[の行為]を為したらんか(*si ipsi iurati et electi ad faciendum negligentes se habeant et super hoc conuincantur aut aliquod concealamentum facerint in premissis*), 斯かる彼等は、当[Norwich]市に於て犯(*perpetro*)されたる斯くの如き諸々の虚偽を彼等の宣誓に反して(*contra iuramentum suum*)容認(*consensio*)したる所の者として当[Norwich]市共同体に依り選ばれたるかの廿四人[委員]の共同決定(*commune consideracio*)にもとづき重い罰金が科せられるべきであり(*per communem considerationem viginti quatuor electorum a communitate grauiter amercientur ut consensientes huiusmodi falsitatibus in ciuitate perpetratis contra iuramentum suum*), 彼等を罷免(*depono*)して、直ちに彼等に代って[新たな]爾余の者たちを選出し宣誓を行わしめるべきである(*et deponantur et alii loco ipsorum statim eligantur et iurentur*)⁵⁴⁾。』

以上に見たるとき ‘Custumal’ 第46章に現われたる、当市に於て行われて居る総ゆる工芸(*artificium*)ないし手工業(*officium*)における・夫れが為さるべき[ルール]に反するところの欺瞞(*fraus*)・詐偽(*dolus*)・虚偽(*falsitas*)とは、抑々具体的には手工業者のいま如何なる行為を指して斯く言うのであろうか?

夫れは、例えば、先きに我々が見た1291年の此の市の Wymer 地区のリート裁判所記録に現われた皮鞣し職人(*tannator*)の非行——彼の原材料たる生皮(*correos*: 未だ毛と脂との附着したままの厚い獣皮)を揉す仕事に当って通常用いられる梣・榿等以外の梣(とねりこ)の樹皮を使用すると云った行為のごとき、がいま挙げられるであろうが、そのほかにもなお、(史料的には未だ十分に確認せられて居ないが)、一般に各種部門の手工業者間に於ける不当なる自由競争に係わる所の諸行為、——各自の経営規模の諮意的なる拡大、徒弟・奉公人の争奪・増強、精

54) Hudson & Tingey, edd., *op. cit.*, Vol. I, pp. 192-4.

選と吟味とを経ざる原材料の使用、仲間を出し抜いての原材料の買占め、生産行程における様な粗製濫造行為―一手抜き、製品価格の協定破り、顧客の争奪、等々の如きものが考えられるであろう。而して、斯かる諸行為を当市の総ゆる工芸ないし手工業の諸部門からいま一掃・根絶せんがために、年間少くとも四回各職場を巡回し臨検し管理する所の任務を委託せられたる、2人ないし4人に若干名を加えたる者が爰に毎年選出せられることになる訣であるが、その場合彼等を選出する権利を有する者として其処に、本来王の代官たる4人のベイリフたちのほかに、「共同体の名に於て」(*nomine communitatis*)「共同体に依って」(*a communitate*)「共同に」(*communiter*)選挙(*electio*)せられた「当市の廿四人」(*viginti quatuor de ciuitate*)がいま名を列ねて居ると云う事実こそが注目せられなければならない。即ち、彼等―各職場を実地に巡回・臨検すべき者を選出する所の者たちは、唯単に4人のベイリフのごとき此のroyal boroughたるNorwichにおける王権を代表する者たちばかりではなくして、此の都市共同体を代表する所の者たちも亦之に加わって居たのである。而して、いま斯かる彼等に依って選出せられたる・少くとも一年に四回各仕事場を巡回・臨検・管理する所の使命を帯びたる者たちは、彼等にして手工業のルール違反者たち(*delinquentes*)を発見したる時はその都度直ちに彼等を4人のベイリフたち・24名の都市民代表たちに告発することに依って、後者をして、今後斯かる違反者を出さざるよう見せしめのために彼等違反者に対して重い補償金(*emenda*)を科せしめることになる訣であるが、その際、斯かる告発の義務=権限の遂行に当っていま職務上の怠慢の有りたる者に対しては、また、4人のベイリフたちを除外したる残りの24名の都市民代表のみに依る所の共同決定(*commune consideracio*)に基づいて重い罰金(*amerciamantum*)が科せられるべきことが謳われていて、其処に我々はいよいよ各職場監督の窮極の責に任ぜる者たちのいま人民代表的な性格が顕著に現われて居ることに注目せしめられるのである。

ただし、直接各職場を巡回・臨検・管理する所の任務を委ねられる者たちの選出母胎が、果して手工業の各種部門であったか否か、は、此の‘Custumal’第46章の規定の文面を見るかぎり、必ずしも明確ではない。其処には、唯、斯かる者たちの選出に関しては、『各手工業に就いてより一層思慮深くして信用し得べき所の二人或いは三人或いは四人、或いはまた当市に於て行われ居る所の各手工業ないし工芸の大小の規模に応じて斯かる事柄に就き精通している其の他の者たち』の毎年選出せられるべきことが規定せられて居るに止まるのである。とは言え、我々は、此の‘Custumal’第46章の規定の文面の背後には、当時第13世紀末葉此処Norwich市に既にもはや*de facto*のcraft guildの存したる歴史的現実の伏在することを、――向後第15世紀中葉に於て何らかのcraft guildの一員たらざれば何びと雖も如何なる手工業にも携わることを得ず・当市の自由なる都市民たることを得ずとする一般的原则が其処に確立せらるべき所の可能性を孕んだ歴史的現実の伏在して居ることを、どうしても想定しない訣には行かないのである⁵⁵⁾。

55) Cf. Hudson, ed., *Leet Jurisdiction in the City of Norwich*, Introduction, p. lxxxix.

V

それでは、前掲 Tingey のリストに見られた、服地商[39—*drapier*]], 鉄商[66—*ferun*], リンネル布地商[77—*lindrapier*], 高級服地商[80—*merciarius*], 毛織物商人[81—*mercator*], 塩商人[102—*salsarius*], 香辛料商[113—*especiarius*]], 大青商[131—*weydere*], 羊毛商人[132—*lanator*]のごときいま専門的になるところの商人たちは、Norwich の都市経済において、抑々如何なる役割を演じたのであろうか？ 結論を先取して言うならば、彼等は、短距離商業の局地的市場たる該の週市に如何なる意味に於ても全く寄与しなかった訣では決してないが、併し乍ら、彼等の主たる活躍の舞台は、いま此処 Norwich 市の長距離商業の市場にこそ存したのである。

抑々此の都市の長距離商業の営為の歴史たるや其の起源は極めて古く、「征服」以前の Anglo-Saxon 時代に淵源している。即ち、考古学者は、今日迄に、此の都市の疆域から、第7世紀以降第9世紀にかけての Anglo-Saxon 時代の初期 夙に East Anglia 地方に普及せる・Norfolk 州の南隣 Suffolk 州の Ipswich 産の陶器の破片(sherd)とならんで、一連の海外より輸入せられた陶器の破片を発掘して居るのであって、夫れらは元来第9世紀ないし第10世紀にかけて大陸のラインラント方面より将来されたものであることが立証されて居るのである⁵⁶⁾。なお、我々の定義に従えば同様にいま長距離商業の範疇に入れらるべき事象に属するが、その後第9世紀より第11世紀にかけての Anglo-Saxon 時代の末期 East Anglia 地方に一般に広く用いられた・Norwich 市の西南の都市 Thetford 産の陶器の破片がまた今日迄に Norwich の市域内の随所に於て発掘せられて居る、と云う考古学的事実にも亦、我々は注目しなければならない⁵⁷⁾。

上述の如き「征服」以前の我が Norwich の長距離商業の展開に就いては、我々は其処にかの Danes の侵入の影響を見逃すことは出来ない、——此の戦争と海賊と商業との Goethe のいわゆる „Trinität“ の好個の世界史的例証の体现者たるところの Vikings の一派は、凡そ865年の頃我々の East Anglia 地方への侵入を開始して、870～917年の間此の地方を占領＝支配したのであるが、斯くの如き彼等の支配は我が Norwich にも其処に幾多の痕跡を留めている。一例を挙げれば、此の都市の街路名は中世時代を通じて ‘street’ の代りに最も屢々——今日我々が北欧都市に於て時に之を見聞するように——‘gate’ [Old North—*gata*] を伴って表わされて居ると云うが如き、その最たる地名学的証拠である⁵⁸⁾。而して、元来、彼等は、その支配の拠点を、一面に於て城砦であると同時に他面に於て商業的中心でもあるような地点に置いた。かの Lincolnshire 州の Lincoln, Stamford ; Leicestershire 州の Leicester ; Nottinghamshire 州

56) James Campbell, ‘Norwich’, in *The Atlas of Historic Towns*, Vol. 2, p. 4.

57) *Ibid.*, p. 4.

58) *Ibid.*, p. 5. Cf. Susan Reynolds, *An Introduction to the History of English Medieval Towns* (Oxford, 1977), p. 37.

の Nottingham ; Derbyshire 州の Derby の、謂う所の ‘Danelaw’ 地方における ‘Five Boroughs’ は、まさしく斯くの如き城砦＝市場を典型的に具現せる都市であるが、Norwich も亦、前記 Thetford とともに、いま East Anglia における Danes の支配の拠点として同様軍事的＝商業的中心たる役割を演じたものと思われる。因みに、前述した所の Thetford 産の陶器も、もとはと言えば、同地に Danes が定着したのち間もなく彼等に依って連れて来られた・ラインラント出身の陶工たちの制作に係わるものであろうと云うことが、彼等 Danes がフランクの造幣人(monetarius)を Danelaw 地方に強制移住せしめている、貨幣史上の確証の有る事実から類推せられるのである⁵⁹⁾。

いったい、我々が Norwich と長距離商業とのかかわりを考える場合、常に念頭に置かねばならないことは、抑々此の都市が歴とした一個の港市(port)であった、と云う事実、是れである。何となれば、夫れは地理的には海岸線より相当奥まった内陸(inland)に位置して居るとは言え、此の市は、北海に注ぐイェア河 The Yare に合流する・潮の干満の影響を蒙る所の(tidal な)ウェンサム河 The Wensum の河畔に立地していて、いま Wensum, Yare 両河を通じて容易に北海上に出で得る、水運の便に恵まれていた都市であるからに他ならぬ。既に、我々が有する此の市に関する最古の文献的史料—‘Anglo-Saxon Chronicle’ は、その1004年の条に於て、Danes の首領 Swegen(Swein)が彼の艦隊を率いて(mid his flotan)此の町(burh)を劫掠、焼尽したことを記録している⁶⁰⁾。其の場合、此处に現われる burh[ME.—borough]なる語は、当時の慣用に従って、また port[ME.—port]なる語と同意語的に用いられたのであるが、此の port は当時第10、11世紀の文献的史料の上に於てはまさに市場町(market town)を意味したのであった⁶¹⁾。ともあれ、いま、Norwich は、1066年の「征服」ののち ‘Domesday Book’ 編纂時(1086)にあつては猶然したる存在ではなかった所の、前記 Yare の河口なる Yarmouth が、その後第12世紀に入り1100年ごろ以降漸く Norwich を凌駕せんとする港市として擡頭し来るまで、ほとんど East Anglia における唯一の代表的な港市であったのである⁶²⁾。が、その場合、もはや第11世紀の「征服」以後の時代に於ては、大陸ラインラント方面よりの陶器の輸入貿易に代つて今や大陸ネーデルラント地方への羊毛の輸出貿易こそが、此处 Norwich の対外商業に於ける支配的な形態を現わしたのであった。

このことは、抑々 East Anglia 地方自体が、‘D. B.’ の記述に依つても知られるように、当時夙に早熟的な地域間分業(specialization within regions)の兆候を現わし始めていて、Nor-

59) Campbell, *loc. cit.*, p. 5 ; Michael Dolley, *Viking Coins of the Danelaw and of Dublin* (London, 1965), pp. 17-20.

60) *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, ed. by Charles Plummer (2 vols. ; Oxford, 1892-99), Vol. I, pp. 134-5.

61) 拙著『イングランド中世都市の展開』(刀水書房, 1987年), 44-5, 50, 63ページ註(67), 参照。

Cf. P. H. Sawyer, *From Roman Britain to Norman England* (London, 1978), p. 204.

62) Campbell, *loc. cit.*, pp. 6, 14.

folk 州の潮間陸地の低湿地帯 (salt marsh) に於ては其処に大いなる牧羊業 (sheep-farming) の集中 (concentration) が見られたばかりではなく⁶³⁾, 第13世紀の頃ともなれば, 此の East Anglia 地方を含めて一般に東部イングランドの沿岸の諸港市には, 今やイングランドの中部諸州地方 (Midlands) の西部から, 大陸の毛織物工業の先進地方—フランドゥル[またブラバント]地方へ向けて輸出せらるべく羊毛が大量に輸送せられ来ったのであるから, まことに自然の成行であったと言わねばならない⁶⁴⁾。古く Eileen Power は, 周知のように, 彼女の先駆的著作〈イングランド中世史上の羊毛貿易〉に於て, 第13世紀を以て牧羊業の極めて急速に成長した時期と見做して, フランドゥルの毛織物工業の拡大に伴う所の羊毛の需要の増大, シトー派 Cistercians をはじめプレモント派 Praemonstratensians, ギルバート派 Gibertines 等新興修道会の創立に依る所の羊毛の供給量の増大を, 右の成長の基礎的要因として挙げたのであるが⁶⁵⁾, 近くは, P. H. Sawyer は, 1113年の春, パリの北東方 Laon のキャノンたちとともに羊毛買付けのため英仏海峡を渡ってイングランドを訪れた所のフランドゥル商人たちが, いま 300 マルク[—200ポンド]をもって集荷せるところの彼等の羊毛を Kent 州の Dover 港に於て船積みした事実を指摘して, 恐らく是れと同様な交易は是れより1世紀以前[—第11世紀]に於ても単に此处 Dover に限らず東部イングランド沿岸諸都市に於て既に一般的に行われていたであろう, と推測している⁶⁶⁾。我々は, 不幸にして我が Norwich に関して未だ斯かる羊毛取引に関する直接的な証拠を何も見出し得て居ないのであるが, 既掲の Tingey のリスト中に明らかにいま羊毛商人 (lanator) が挙げられてあるのを見れば, 第13世紀末葉此の港市に於ても, 我々が先きに本稿第Ⅲ節に於て具さに之を検討したる所の・第13世紀末事実上成立せる ‘Custumal’ の第35, 36, 41, 42の諸章に瀕出せる, かの外来商人 (forinsecus; extraneus) を相手とて当市の羊毛商人が羊毛の取引を行ったことはほぼ間違いない所であろう。而して, その際, 両者は, 是れが取引—販売・購買に当っては, 是れまた前記 ‘Custumal’ 第35章に詳細に規定せられていた, 王の所有に係わる所の当市の公共の計器—大竿秤 (tron) を以て彼等の取り扱う所の羊毛の計量を行い, 王に対して王の banalité にもとづく強制的共同使用料—tronagium を納付したるものと推断せられるのである。なお, 第13世紀末葉当市に於て此ののち飛躍的に発展すべき毛織物生産が既に或る程度の水準に於て存在していたであろうことは, 是れまた既掲 Tingey のリスト中に我々が織布工 (128—telarius), 縮絨工 (49—fullonarius), 染色工 (41—tinctor) の

63) Cf. Edward Miller & John Hatcher, *Medieval England—Rural Society and Economic Change, 1086–1348* (London, 1978), p. 8.

64) Cf. J. L. Bolton, *The Medieval English Economy, 1150–1500* (London, 1980), p. 151.

65) Eileen Power, *The Wool Trade in English Medieval History being The Ford Lectures* (Oxford, 1941; Reprinted, 1965), p. 33 [山村延昭訳『イギリス中世史における羊毛貿易』(未来社, 1966年), 42ページ]。

66) P. H. Sawyer, ‘The Wealth of England in the Eleventh Century’, *Transactions of the Royal Historical Society*, Fifth Series, Vol. 15 (1965), p. 162.

ごとき元来衣料生産工程に関与する所の職人たちを見出すことに依って瞭らかなところであるが、其の場合、いま染色工の存在は、おなじ Tingeys のリスト中に専門的な商人として毛織物商人(81—mercator)と並んで大青商(131—^{たいせい}weydere)が挙げられて居る事実との関連に於て、まさしくいま我々の注目に値いする。と云うのは、ほかでもない、——此の大青(*weyda*; *waida*)と云う元来アブラナ科の植物は、単に青色の毛織物生産の際着色のために有用であったばかりではなく、青色以外の^{いろ}の毛織物の生産の際にもその下染めに用いられ、当時毛織物生産上欠くべからざる所の最重要なる染料であったのであって、此の植物は、此の国に於て Anglo-Saxon 時代末期から栽培せられていた確証が存するが、第12世紀の頃には此の国の土産のもの以外に西ヨーロッパの各地から大規模に輸入せられ、なかんずく西北フランスのアミアン Amiens, コルビイ Corbie, ネール Nesle などソーム Somme 河流域一帯の町々から大量に輸入せられたからである⁶⁷⁾。いま、Norwich の 'Book of Customs' は、その中に、Edward I 王の治世第14年—1286年の使徒ペテロとパウロの祝祭日[—6月29日]当日成立せる、当時大青の販売に関して生ぜる所の紛争の当事者——原告たる・Amiens, Corbie 両町の・Nicholas le Mouner 以下6名の^{大青}(*weyda*)商人と、被告たる・Adam de Toftes 以下4名の Norwich のベイリフ並びに爾余の Norwich 都市民[—商人]との間の、後者の譲歩に依るところの合意に関する記録を含んで居るのである⁶⁸⁾。

以上、我々は、既掲 Tingeys のリスト中に現われたる専門的な商人—羊毛商人・毛織物商人・大青商について一瞥した次第であるが、そのほかまた鉄商(66—*ferun*)、塩商人(102—*salsarius*)、香辛料商(113—*especiarius*)のごとき、Norwich 市自身および其の近郊に於ては^{凡そ之を生産し能わざる所の}——該の生産が自然的地理的諸条件に依って地域的に限定せられる物資の購入—販売に携わる所の専門的な商人たちが、いま、局地的な短距離商業ならざる長距離商業にかかわりを有したことは、更めて此処に縷説するを^も須いないであろう。

然らば、斯かる専門的な商人たちは、当時商人ギルド(guild merchant)を結成していたであろうか？

此の点に関しては、曾て、我々は、1256年 Henry III が Norwich 市に賦与したる所のチャータの一節に現われた *Gilda* の解釈を繞って、是れを以て商人ギルドとなしたる Merewether—Stephens 説批判を通じて Hudson に依って其処に提起せられた定言——Norwich には未だ曾て商人ギルドの存在したる如何なる痕跡も存せず——を見たのであるが⁶⁹⁾、実は Hudson よりも早く、かの Charles Gross は研究史上最も包括的なギルド研究の古典たるその〈商人ギルド〉に於て、既に、「ロンドンの市制(constitution)にいま範をとって其の市制を構成した所の諸都市」——Devonshire 州の Exeter ; Northamptonshire 州の Northampton とともに我々の

67) 前掲拙著『イングランド中世都市の展開』, 278-279ページ, 参照。

68) Hudson & Tingeys, ed., *op. cit.*, Vol. II, pp. 209-12.

69) 前段, 152ページ以下, とくに153-154ページ, 参照。

Norwich には「如何なる Gild Merchant も存在しなかったように思われる」と曰っており⁷⁰⁾、また Hudson 以後に於ても、L. F. Salzman は、ロンドンとともに前記 Dover を含む所謂「五港」(the Cinque Ports)と並んで我々の Norwich における Gild Merchant の存在を否定し⁷¹⁾、A. L. Poole また、ロンドン、Norwich のごとき最も発達せる都市の若干のもの(some of the most advanced towns)の、竟に如何なる商人ギルドをも之を有せざりしことを曰って居るのである⁷²⁾。

以上、我々は、我々が本稿第Ⅲ節に於て其の第33—44章を具さに検討したる所の、第13世紀末葉に事実上成立を見たる・Norwichの古来の慣習法の集大成—‘Custumal’の其の成立に至る迄の歴史的背景——此の都市の現実の客観的な経済的基礎構造の歴史的な推移・変遷の過程、を、Anglo-Saxon 時代より始めて第13世紀末葉に於ける‘Custumal’の事実上の成立時点に至る迄辿り来ったのである。——すなわち、先ず本稿第Ⅳ節に於ては、我々は、基本的には、此の都市の Hinterland をなす所の近郊農村の農民が此の都市で定期的に開催せられる週市(weekly market ; Wochenmarkt ; marché de semaine)において、此の都市の定住民たる所の独立の小生産者—手工業者と、專業的商人を介することなしに直接に交渉し、いま前者の世帯から生ぜる所の余剰生産物すなわち自らの必要生活手段を控除し且つは領主に対する生産物地代給付の義務を果したるあと手許に残れる生産物と、後者の手工業生産物とが直接的に交換せられる所に成立する、‘local’な短距離商業の定期的市場—週市を舞台に展開せらるる流通過程、斯かる流通過程の基礎を形成せるところの此の都市の諸々の手工業の生産過程、の発展を、いま史料の許す限り可及的に追跡し、——次いで本第Ⅴ節に到っては、如上の局地的な短距離商業といま対蹠的な関係に立つ、‘inter-local’な・專業的商人に依って荷担せられる所の此の都市の長距離商業の流通過程の展開を——その基礎をなす生産過程の夫れをも可及的に視野の裡に包摂しつつ——及ばずながら追究し来ったのである。斯くて、我々の斯かる叙述において、我々が、此の中世都市 Norwich の経済的基礎構造の客観的・必然的な発展過程を、いま第Ⅳ節に現われたる過程と本第Ⅴ節に現われたる過程とのふたつの過程に於て、その重層的なる統合関係に於て、把握して居ると云うこと、——その際この両者のうち前者の第Ⅳ節に現われたる過程をこそ飽くまでも後者の第Ⅴ節に現われたる過程の基礎・前提をなすものとして把握・理解して居ると云うこと、は、茲に自ら明らかなる所であろうと考える。

では、いま、第Ⅳ節の主役を演ぜる手工業者＝職人と第Ⅴ節の主役を演ぜる專業的商人との、

70) Charles Gross, *The Gild Merchant: A Contribution to British Municipal History* (2 vols. ; Oxford, 1890), Vol. I, pp. 21-2, n. 5.

71) L. F. Salzman, *English Trade in the Middle Ages* (Oxford, 1931), p. 71.

72) A. L. Poole, *From Domesday Book to Magna Carta, 1087-1216* (Oxford, 1951 ; 2nd edn., 1985), p. 72.

相互の主体的なる関係は、凡そ如何なるものであったであろうか？——此の点を、最後に簡単に考察することに依って、此の小稿を閉じようと思う。

端的、直截に言って、此の時代この中世都市の手工業者 = 職人たちは一般的に一握りの専門的商人たちに社会的に従属して、そこに実質的には彼等専門的商人に依るところの・都市行政上の寡頭支配—, Oligarchie“を漸く現出せしめつつあった、と考えられる。

もとより、このことは、実質的に——事実上 *de facto* に、そうであった、と言うに止まる。当時の Norwich が、形式的 = 法的 *de iure* には、飽くまで全都市民の裁判集会を以て其の窮極の存立基盤とするところの民主的自治 = 自律の中世的な誓約共同体(Schwurgemeinde)であったことは、我々が本稿第Ⅲ節に於て‘Custumal’の分析を通じて繰り返し繰り返し之を析出したる如くである。たとえば、其処に、本来この‘royal borough’の領主たる所の王に依って任命せられ、都市行政府の首脳部を形づくれる、かの4人のベイリフが存在するとしても、上記の命題は一般的には妥当、成立する〔本稿(一)、本誌前号、54ページ以下、参照〕。然し乍ら、其処に存在する、飽くまで形式的には、本来都市行政なる「社会的職務執行活動」の機能を分担する「機関」たるに過ぎない所の斯かる4人のベイリフは、当時、その機能の実態に於ては、かの craft guild の彼等に依る抑圧に於ても見られたるが如く〔前段、第Ⅳ節、152-5ページ、参照〕、一部の都市民、すなわち、羊毛商人、毛織物商人、大青商、——また既掲 Tingey のリストには洩れていたがかの‘Custumal’の第33、34章に於ては計量器(*mensura*)の検定(*assaia*)に関連してその存在が事実上認められたる所の〔本稿(一)、本誌前号、52~53ページ、参照〕、大陸 Gascogne 産葡萄酒の輸入 = 販売に従う葡萄酒商人(*vinetarius*)、と云った、いま長距離商業に携わる所の各種の専門的商人——いわゆる大商人(*Großhändler*)に依って代表せられる、一部の都市民——一部の上層都市民、の現実的な利害を代弁する所の者であったのである。——このことは、‘Custumal’を徹底的に解析せる所のかの Hudson 自身が、早くも第13世紀の終末時に於てすら(even at the close of the thirteenth century), [‘Custumal’全体の基調をなす]都市民の平等と云う主張(an assertion of equality)は漸次風化しつつあり(.....was becoming weakened), 此の傾向は、第14世紀の進行と共に(in the course of the fourteenth century), Norwich の都市民共同体の爾余の者[——一般都市民]の地位の低下[なる地殻変動]を其処に惹起せしめつつ(to the derogation of the rest of the community), [一部上層都市民が]一つの支配集団(a ruling body)として自己を確立せしめて行くところの傾向の進展と、いま著しい対照をなしている⁷³⁾、と、極めて示唆に富んだ証言を遺して居ることに依っても、肯かれ得る所であると思われるのである。 [完]

73) Hudson & Tingey, ed., *op. cit.*, Vol. I, Introduction, p. cxxi.